

「平和と互いの向上を追い求める」（ローマ一四章一三～二三節）

1 交わり^{コイノミテ}

宣教、交わり、そして奉仕、この三つが昔から教会の働きとして、あるいは教会の務めとして上げられるものです。

宣教とは福音の証しであり、伝道のことです。あるいはミッションという言葉で表してもいいと思います。

交わりというのは文字通り信徒の交わり、兄弟姉妹の交わりですが、イエス・キリストが主として治めておられることによつて成り立つ交わりです。たんに人間同士の、人間的なお付き合いのことではありません。

最後に奉仕ですが、聖書の言葉ではディアコニアといいます。その意味はもともとは神への奉仕です。神に奉仕するという気持ちをもって、人に奉仕する、人々に、この世に仕えることです。福音書にはイエスがたくさんのいやしをなさったことが書いてありますが、教会の奉^{ディアコニア}仕はこのイエスのいやしの働きを継承しているのです。苦しんでいる、弱っている人たちを助ける働き、それが奉仕です。この三つのこと、宣教、交わり、そして奉仕、これが教会の基本の務めです。

さて今日の聖書箇所、教会の交わりが問題であることは一読して明らかです。「兄弟」という言葉もくり返し使われています。あとで少し詳しく申し上げたいと思いますが、教会の交わりにおいて、兄弟姉妹の間で裁き合うということがあった、他人の心を傷つけるようなことがあった、パウロは、ローマの教会のそうした問題を伝え聞いて、戒めと勧めを記しているのです。

伝え聞いたことが問題だとパウロが感じた、つまりちよつとした行き違いにすぎないのではなく（行き違いなのかも知れませんが）、しかしここはきちんと取り上げておかなければならないと思つた理由を明かしている言葉がこの箇所にくっつかあるように思います。その一つが15節の言葉です。

あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません（15節）。

ここで「あなたはもはや愛に従って歩んでいません」という言い方に注目していただきたいと思います。この言い方は愛に従って歩むということがキリスト者としての、教会員としてのもつとも根本なことだということを前提とし、前提であることを相手方もよく知っていて、しかもそれにそつた在り方をしていない、そういう指摘、言い方です。

じつさいそうなのです。愛に従って歩む、このことをキリスト者の基本のこととしてパウロは、ここまで語ってきたのです。ローマ書の一二章と一三章ですが、今日はそこまで振り返る十分な余裕はありませんが、パウロは信仰にもとづいた新しい生活

の規範として愛を上げ、愛に従って生きることを、信仰の生活として明らかにしてきたのです。「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい」と一二章で語り、「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあるわけではありません。・・・愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです」と一三章で語っています。兄弟愛を教会生活の、隣人愛をもっと大きなキリスト教生活の基本として語っています。そうした中でもしあなたが自分の食べ物のことで兄弟の心を痛めるようなことがあれば、その根本の愛の戒めに反することになるのではないかとパウロは訴えているわけです。

愛についても一言で語るとすれば、自己本位の反対の意味で、他人本位といっていると思います。他人のいいなりになるということではなく、他人（ひと）の立場に立つて考える、行動するということです。そうしたことがあなた方の交わりに欠けているのではないかとパウロは問うているのです。

2 善いことがそしりの種にならぬように

さて具体的にここで何が問題であったのかを申し上げなければなりません。問題は一四章のはじめから語られていることです。

教会員の間で、信仰についても、愛を基として生活すべきことについても、基本的な考えは一致していました。それは疑う余地のないことです。そうでなければ一緒に教会員であるはずはありません。しかしそれをどのように実践していくかという点でいろいろな考えの違い、いろいろなやり方の違いがあったのです。ここに上げられているのは、肉を食べない、野菜しか食べない人たちの存在です。あるいは特定の日に重んじている人たちのことです。

ただここでそれを問題にしているのは、なぜそうなのかとか、それは正しくないとか、彼らを改めさせよう、そういったことをいうためではありません。もちろん背景となることはありました。当時食用の肉というのは、どこかの神、あるいは神々にいったん供えられて、そこから下ろされて市場に出回っていました。ですから自分たちの口にする肉が、真の神以外の神に、つまり偶像に供えられたものかも知れない、それゆえ汚れているかも知れない、それを気にしながら食べる。しかしそれもいやなことなのでいっそのこと肉は食べないと決めてしまった教会員がいたわけです。聖書はそれを「弱い者」といっています。しかしくり返し言いますが、それが間違いだということもいっているわけではありませんし、多様性として認めなければならぬといっているのではない。そういう人が教会の中に現にいるということです。

ここでのパウロの訓戒はだれに向けられているのかは、明らかです。弱い者に向けられたものではない。弱い者・強い者双方に向けられたものでもない。強い者たちに向けられたものです。「あなた」ないし「あなたがた」とは、肉を食べる人、強い者たちです。

あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩

んでいません。食べ物の中で兄弟を滅ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んでくださったのです。ですから、あなたがたにとって善いことがそしりの種にならないようにしなさい (15-16節)。

パウロ自身は自分が強い者の側にいることを隠そうともしません。次の章15章のはじめに「わたしは強い者」とはつきり書いています。肉を食べないとか、どこか特定の目を重んじるとか、そういういわば信仰生活の、すりのようなものを必要ないと考えているからです。偶像に供えられたといっても、神はただおひとりなのであって、そもそも偶像というものもそれが神だとすればそんなものはないのです。ですからそれに供えられたとしても問題にならない、肉は汚れていない、食べても汚れることはない、パウロはそう考えます。彼も含めて強い者はそう考えます。

しかしこうした自分にとって「善いこと」、自分の自由な考え、自由そのものといつてもいいかも知れませんが、自分にとっては当たり前のこと、このことが、他人を傷つけることにならないように、その自由が、非難されるようなことにならないようにとパウロはここで戒めているのです。相手がいやなことを知っていながら、オレの自由だからといってやめない、というようなことがないようにといっています。自分に夢中になって他の人が目に入らないというようなことがないようにと彼は戒めています。

すべては清いのですが、食べて人を罪に誘う者には悪い物となります。肉も食べなければぶどう酒も飲まず、そのほか兄弟を罪に誘うようなことをしないのが望ましい (20-21節)。

「食べて人を罪に誘う」というのは、肉を食べる「強い者」が食べない「弱い者」の前で、あるいはそのいうところの「偶像の神殿」(「コリント」8章10節)で、これ見よがしに食らう、それを見て「弱い者」が、無理をして、気持ちを高ぶらせ、自分も食べる、しかし食べるべきではないという気持ちは整理できないままにいますので深く傷ついてしまうということです。それなら、パウロがいうように「肉も食べなければぶどう酒も飲まず、そのほか兄弟を罪に誘うようなことをしないのが望ましい」といわなければならぬのです。強い者は強くない者の弱さに配慮すべきであって、自分の満足だけを求めるべきではないとパウロはいいます。なるほど自由は大切です。肉を自由に食べることに対して、だれも文句はいわない。しかしそれが食べない人を傷つけるとすれば、どうでしょうか。自由とは、他人のために自らの自由を制限できる自由、自分を甘やかすことにならない自由でなければならぬ。自由からも自由であるのが自由です。他の人のため、ここでいう弱い者のために自分の自由を私は行使しない、断念することです。私どもはそれほど自由に自由でなければならぬ、とパウロはいうのです。

3 平和と互いの向上のために

宗教改革者ルターの『キリスト者の自由』という小さな本についてはここでも何回か触れていると思います。

プロテスタントの信仰のもつとも基本となる事柄、行いによってではなくただ信仰によってのみ義とされる・救われるということ、また救いにおいて排除された行いも、私どもが肉の弱さをもっているがゆえに必要であり、また隣人と共に生きるためになされるというようなことが書いてあります。ルターが三七歳のとき書いた代表的な著作です。

この本を彼はキリスト者とはどういう人なのか、またキリストが私どももキリスト者に与えてくださった自由とはどういうものなのかと問うて、二つの命題をかかげて書き始めています。二つの命題とは、一つは、キリスト者は万物を支配する自由な君主であつて何人にも従属しない。もう一つは、キリスト者は万物に奉仕する僕であつてすべての人に従属するというものです。何人にも従属しない、すべての人に従属する、この一見矛盾する自由と奉仕の中にキリスト者の自由はあるというのです。キリストもこのような自由に生きられた。そして御自分の満足をお求めになりませんでしたとパウロは書いています(153)。

イエス・キリストは私どもをその十字架の死と復活によって罪から解放し、新たな命を与えて、自由に生きるようにしてくださった。しかしこうして与えられた自由を私どもはただ自分に自分のために用いるのではなくて、愛をもって他に仕えるために用いる。それが、御霊によって導かれるキリスト者の歩みであり、そこに真の交わりが生まれます。パウロがここでくり返し語っているように、教会の、キリスト者の主にあるそうした交わりは食べ物や飲み食いにまつわるようなことで壊されてはならない。それゆえこう言われています。

神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。
・・・だから平和や互いの向上に役立つことを「口語訳、互いの徳を高めることを」追い求めようではありませんか(17,19節)。

神の国とは、神が主としておられるところです。教会も神の国です。ここにも神は主としておられます。ここで聖霊によって与えられるのは、神の義であり、神の平和であり、神から来る平安と喜びです。

とりわけ私どもは教会で平和を求めなければなりません。また「互いの向上に役立つこと」を求めよと命じられています。「向上」の意味は「建設」です。教会の交わりの中で人が人として造られていくということです。教会の交わりの中で神様の教育を受けるといふことです。こうした平和と互いの人格の形成、そこに教会の交わりの真実と目標があります。私どももこの教会にあつてそうした交わりを倦むことなく追い求めていきたいと思うのです。

(二〇一八年九月三〇日 改題)